

書庫の明け暮れ

中 村 久 藏

今年、附属図書館が閲覧業務開始100周年を迎えるに当たり、『静脩』臨時増刊号の原稿を依頼されました。提示されたテーマは私にとって実に的を射たもので大変恐縮しております。

私は昭和27年5月に附属図書館受入掛に就職しました。其後、文学部、教育学部、附属図書館、経済研究所と平成7年3月に文学部を定年退職するまで43年間、図書職員として勤務させて頂きました。今回のテーマ「書庫の明け暮れ」という言葉をきくと、私は何とも云えぬうら淋しさと、くたびれたものを感じるのです。この事は、私が京大に初めて就職し、勤務した附属図書館での3年間の「貴重な経験」が心に残っていたからだと思います。当時私の附属図書館受入掛での主な仕事は、図書の受入と、受入した部局図書の内本部構内以外の農学部、東洋学文献センター、教養部等の図書を配達することでした。その作業は月1～2回で、運搬用のトラックを本部事務局から運転手と共に受入掛に回してもらい、両端に荒縄のようなひものついた木箱や、パイル製の箱に毎回20箱余り図書を詰め、それを荷台に積み上げ、先輩や用務員さんと荷台に乗り込んで配達しました。この作業は事務局の都合もあって、小雨でも決行されることがありました。車の運転手は、当時定年制もなく、今から思うと70才に近い白髪まじりで丸刈頭の小柄な方でしたが、小雨模様の日の配達の時などは、年のわりに荒っぽい運転をされ、荷台に乗っている私達はしゃがみ込んで車体にしがみつくという恐怖を感じたこともありました。この様な仕事の他に、私にはもう一つの任務がありました。それは毎朝出勤する、一番先に旧書庫の入口の扉と庫内の窓を開け、夕方5時前になると、開けた窓と入口の戸締りをすることでした。この書庫は附属図書館の北側200mほど離れたところにあり、今の総合博物館の敷地内にありました。この建物は大正時代に建てられたもので、間口は約7～8m、奥行きは南北に60～70mの長方形の建物でした。屋根は瓦ぶきで二棟が渡り廊下でつながっていました。入口は南側の1棟と北側の2棟に一つづ

つあり、通常は南側の入口を使用しました。書庫内の壁はレンガを積み、それを漆喰で塗り固めた部厚い壁でした。1棟めの書庫は内部が2室に分れ、仕切りはコンクリートの敷石にレールがあり、重量のある鉄の引戸で開閉しました。窓は各室共西側と東側合わせて8ヶで、三重式となっていて、一番外側が鉄扉で次に鉄格子があり、最後の内側に上下に開閉する木枠のついたガラス戸が取り付けられていました。庫内の照明は中央通路の高い天井に、1m程の間隔で円形のガラス笠をつけた丸電球でした。書架は木製で背丈程の高さのものを二重に積み上げた設計で、重ねた部分と下の書架の基部は金具で床に固定されていました。庫内は窓を開けていてもいつも湿気と埃りを含んだ匂いがしていました。特に2棟目の庫内は、貴重書や骨董品等が多数所蔵されていたので、樟脳など、防虫剤の強烈な匂いが充満していて、30分もいると目がちかちかして、頭痛がしました。

受入掛3年目に2階の閲覧掛に配置換となり、その後1年間閲覧業務に従事しました。閲覧掛員になって、朝夕の旧書庫の戸締まりの任務は用務員さんに引き継がれることになりましたが、閲覧掛での旧書庫の図書の利用が意外と多く、書庫が離れているので、その貸出利用は午前2回と午後2回とに制限されていました。しかし本館から200mも離れた旧書庫からの図書の出し入れは大変でした。その当時はリフトやエレベータもなく、特に雨降りの時期は明治や大正時代の製本された新聞の利用があると、リヤカーにシートをかぶせ、傘をさして運ばねばならず、限られた利用者には庫内で利用させることもありましたが、書庫内の図書の管理面もあり、通常の利用にはやはり本館の2階の閲覧室で利用させることになりました。閲覧掛員になって、朝夕の旧書庫の戸締まりの任務は解放されましたが、其後1年間旧書庫の明け暮れで過ごすことになりました。今ではほんとうに懐かしい思い出となっています。

(なかむら きゅうそう：元文学部閲覧掛長)